

久保所長、佐々木元部長らが土質工学会功労章を授与される

当研究所の久保 宏所長ならびに佐々木晴美元第2研究部長は、このたび土質工学会功労章を授与された。この章は、(財)土質工学創立40周年記念事業のひとつとして、学会活動に功労のあった方々に送られたもので、過去には真井耕象(元北大教授)、北郷 繁(元北大教授)、河野文弘(北海学園大学教授、元土木試験所長)の三先生が受賞されている。今回、北海道では、久保、佐々木のほか、木下誠一元北大教授、土岐祥介北大教授、坂上孝幸北海学園大学教授を含め、5名の方々が表彰された。

久保所長は、昭和59年度に土質工学会北海道支部の幹事長、昭和62年度に支部30周年記念行事実行委員会の委員として活躍し、現在平成元年の支部評議員を務めている。支部の活動では、路床・路盤の締固め、CBRおよびK値、土質安定処理などに関する講習・講演会の講師として活躍するとともに、特に道路の凍上に関わる研究については、北海道はもとより広く内外の指導的役割を果たしている。

佐々木元第2研究部長は、昭和42年度からの6年間に支部幹事として活躍、また過去3回の札幌市で開催された土質工学研究発表会にあたっては実行委員として活躍した。支部の活動では、昭和40年以降、土質試験法、土質調査法の講習会を数多く実施し、その普及に努めるとともに、土質工学に関する諸問題、特に泥炭性軟弱地盤の調査・設計・施工に関する講習・講演会の講師として活躍し、現場技術者の資質の向上と土質工学の発展に著しく貢献した。

以上の理由により、両氏は土質工学会北海道支部の発展と土質工学の著しい飛躍に多大の貢献をなしたと認められ、功労章に値するものとして表彰されたものである。

サ □ ン

生きるための破壊

先日、TVで「吹矢かブルドーザか」という特集を見た。ボルネオ島のサラワクに住むベナン族の話である。吹矢による狩猟で明け暮れる彼等の生活は、我々から見れば原始生活に見える。腰に一枚の布切れをまとただけで、ジャングルの中をかけめぐり。電気も車も何にもない。いや、初めからそんなものが世の中にあることすら知らないのだ。そんな彼等のテリトリに、ある日ブルドーザがやってきた。ブルドーザは鬱蒼と繁る熱帯樹林をバッサバッサと倒しながら道路を作り始めた。木材を搬出するためである。真っ赤な色のラテライトの道路が、濃緑のジャングルを縦横無尽にくねっている。伐採につぐ伐採で動物が激減した。裸の山々はスコールのたびに大洪水を起こすようになった。大地が次第に荒廃化し始めた。ベナン族はジャングルから追い出された。吹矢でしか生きる術を知らない彼等に何ができようか。生活のため娘は売りに出された。

日本の熱帯木材の輸入量は、世界の約30%を占めて第3位。そのうち熱帯広葉樹林の丸太の輸入では世界の51%を占めている。そのほとんどは東南アジア諸国から輸入されているが、フィリピンは森林が大幅に減退し86年に原木の輸出禁止、89年に製材も輸出禁止。インドネシアも85年に丸太の輸出禁止。今やマレーシアが主要輸入国となりつつある。ボルネオのサラワク地方もマレーシア国土であり、ここで伐採された木材の6割が日本に輸入されているという。とすれば、ベナン族をジャングルから追い出し、その生活を破壊し、娘を売りに出させたのは日本なのか。

TV報道のニュアンスでは、木材を輸入している日本が一方的に悪いような言い回しであった。熱帯林破壊の原因の一端が日本にあるという世界世論もある。だが、発展途上国が貧困な生活レベルを改善すべく、自らの豊富な財産を処分しているという事実も見逃してはならない。日本が木材の輸入を止めた途端、彼等の貧困からの脱出にブレーキがかかるのである。(といて、日本に責任がないとはいえないが…)。

今アマゾンの破壊が進んでいる。ブラジル政府が生活苦に喘ぐ人々をアマゾンに送り込み、焼畑農業と木材の伐採、鉱物資源の採掘を行わせているからだ。アマゾンは世界の酸素供給源である。アマゾン開発は世界の環境破壊につながる。先進諸国はこぞってアマゾンを守ろうと叫んでいる。だが、その行為が地球の破壊を招くからといって、アマゾンの開発禁止を叫ぶのは勝手すぎるかもしれない。ブラジルの開発担当官は、何時でも開発は止めましょう、その代わりに酸素代をください、といっている。これに対して、どんな回答やできるだろうか。

(記 能登繁幸)